

講演会「多賀城創建一三〇〇年記念 北と南の古代史―周辺から見る 律令国家―」開催の報告

栗原 健

二〇二四年は、七二四年（神亀元年）に律令政府の陸奥国府「多賀城」が創建されてから一三〇〇年になります。このため多賀城市では、3Dホログラムで城の正殿を復元する特別プロジェクトやコンサート、東北歴史博物館における特別展示など種々の記念行事が開催されました。古代史ファンにとっては刺激が多い一年であったことと思います。

しかしながら、ひとりの東北人として、多賀城の設置を「『宮城のはじまり、東北のはじまり』ともいえる」（多賀城創建一三〇〇年記念特設サイトから）出来事と位置づける祝賀の姿勢には、大きな違和感を覚えてしまいます。北方の蝦夷支配の要衝として建てられた城から東北の歴史が始まったとすることは、それ以前の東北独自の世界を無視する偏った歴史観、大和政権のみを正統な権威と見做して東北を他者化する植民地主義の視点そのものではないか。そのような姿勢こそが、近現代にも続いていく「みちのく」への冷たい眼差し、琉球など海外に対する拡張主義につながっていくのではないのか。今回の祝賀ムードは、こうした疑問を改めて想起させるものとなりました。

このため、宮城学院女子大学の人文社会科学研究所とキリスト教文化研究所は、共催で講演会「多賀城創建一三〇〇年記念北と南の古代史―周辺から見る律令国家―」を二〇二四年十一月九日（土）十三時から大学講義館で開催しました。会では、名城大学大学院特任教授の山里純一氏を講師としてお招きして「古代日本と南島」との題で講演を頂いたほか、宮城学院女子大学特任教授の大平聡氏にコメントをお願いし、「古代国家と辺境―北からの考察」と題して報告を頂きました。南島の島々と北方の蝦夷世界という二つの地域に向き合う大和政権の姿に注目することにより、律令国家の対外政策の実態に新たな光をあてる試みです。当日は四十二名の方々が出席し、南北の人々と大和政権の間に存在した交流のダイナミズムについて多くの知見を得ることができました。

次頁から山里氏の講演を講演録として掲載します。